

前回は、天理教社会福祉の歴史的展開について概観した。天理教における社会福祉活動は、1908年の天理教の一派独立を契機とすれば、約110年以上の歴史があり、戦後は、多様な社会福祉活動が組織化される中で、「天理教社会福祉」の理論形成を目指す議論も展開されている。2004年に出版された『天理教社会福祉の理論と展開』（白馬社）が一つの到達点を示しているが、今回は、その中心的な役割を担ってきた金子昭と渡辺一城の先行研究を元に天理教社会福祉の理論的な到達点について整理していく。

天理教社会福祉活動の2つの特性と多様な担い手

渡辺一城は、天理教社会福祉研究会が刊行する『天理教社会福祉』の第1号（1996年）に「天理教社会福祉の理論形成に関する一試論」と題した論稿を発表している。その中で、歴史的な発展を踏まえ、天理教社会福祉活動の2つの特性を指摘する。1つ目は、社会的責任としての側面である。前回、確認したように、天理教は、教勢を拡大するに合わせ、児童の養育施設や、季節託児所といった社会福祉活動を展開してきた。これは、社会的な要請への対応という受動的な側面があることは否めないものの、一方で、教会本部や、各地の教会が地域への貢献として活動を展開してきたと評価できるとする。2つ目は、信仰支援の側面である。例えば、障害者福祉が未成熟な状態であっても、障害のある人を同じ「親神の子」「いちれつきょうだい」と捉えて、包摂する布教活動を展開することによって、結果的に障害者の各布教連盟へと発展してきた。渡辺は、天理教社会福祉の実体は、①社会的な責任としての側面と、②信仰支援の側面の2つの側面を合わせもつとしている。

実際に天理大学人間学部では、「天理教社会福祉論」という講義が開講されているが、金子昭は『天理教社会福祉』の第2号（1997年）の中で、その位置づけについて整理している。その中で「天理教社会福祉論は、天理教学と社会福祉論との境界領域にあって両者が重なりあう社会福祉の諸々の現場において、双方の理念や方法論が対話ないし対決する中に生成する新しい学問である」（p.73）と指摘する。渡辺が整理する①社会的責任としての側面と、②信仰支援の側面、という点からみても、天理教社会福祉の理論形成が、天理教学と社会福祉学の両面からアプローチされることの必要性が読み取れる。

特に、②信仰支援の側面という点に着目した際に、天理教社会福祉活動の多様な担い手が挙げられる。渡辺は、2010年に『天理大学人権問題研究室紀要』に発表した「地域福祉推進と天理教社会福祉の機能」と題した論稿の中で、天理教社会福祉の実施主体を、①天理教系社会福祉施設による事業、②天理教教会による福祉活動・事業、③天理教教区・支部による福祉活動、④天理教教会本部各部署による福祉関係業務、⑤天理教信託者による福祉活動・事業の5つに整理している。

天理教社会福祉活動の特徴は、その担い手が、信仰者個人、教会や教区単位、そして教会本部と異なる層で展開されていることにある。それは、渡辺が整理したように、教団や教会が社会的な要請に応えるだけでなく、信仰者個人が、自らの信仰を深めるための行動として社会福祉活動に取り組むという面があるからである。

誰が「たすけるのか」—救援と救済—

金子昭は、『天理教社会福祉の理論と展開』の中で、「天理教社会福祉の展望」と題して、総括的な議論をおこなっている。その中で、宗教の福祉活動や災害救援活動における「救援」と「救済」のジレンマについて論じる。例えば、災害救援の場合、物資がない、人手が足りないなど「誰でもいいから」というニーズに応える「救援」と、そうしたニーズが満たされた後の心のケアや、魂のレベルでの「救済」に分けられる。宗教者としては、「救援」を通じて、すなわち自らが信仰する教義や神の存在を伝えることを通して、「救済」を目指す、それを受ける側にとっては、宗教者に「救援」は求めても「救済」は求めていないというジレンマが発生する。他の例でいえば、天理教の教会が、里親や、子ども食堂など地域のニーズに応じて社会福祉活動をおこなうことは社会的に歓迎されるが、そのことを通して布教が行われることは容認されないということが挙げられる。

こうしたジレンマを踏まえ、金子は天理教の救済観に注目し、社会福祉活動を位置づける。天理教の救済観は、単に個人の幸福を実現するだけに留まらない。その目的は、「生まれ変わり」という世代を越えた時間軸を通じて、親神が人間と世界を創造した際の目的である「神人と和楽の陽気ぐらし世界の完成」を実現することにある。金子は、その後に発表した『陽気ゆさんへの道—天理教社会福祉の百年』の「天理教社会福祉と現代社会の関わり」の中で、天理教の救済観においては、あくまでも「救済」は、神の領域であり、その「救済」を引き出すための「導火線」として、社会福祉活動を位置づける。神が望む人間同士の「たすけ合い」の輪を社会福祉活動によって社会に広げ、究極の目的である「神人と和楽の陽気ぐらし世界」を実現していくとする。金子はこうした理論的な背景をベースに、各教会・布教所、信仰者個人が「ソーシャル・キャピタル」として「たすけ合い」を生み出す存在となることの重要性を述べている。

このように、天理教社会福祉の理論形成は、社会的な側面と、信仰的な側面の両面、つまり、社会福祉学と天理教学という2つの側面から試みられてきたことがわかる。そして、親神による「救済」を引き出すための人間による「たすけ合い」の実践として社会福祉活動が位置付けられてきていることがわかる。社会福祉、そして宗教の役割が見つめなおされる現代社会において、天理教社会福祉の理論的な課題は何かについて、次回、改めて検討をおこなってみたい。